

[論文]

歌唱共通教材に関する一考察

共通教材の誕生と変遷、学生の認知度調査から

山本 陽子

A Study on Common Materials for Singing

— From the changes in Common Materials,
and the investigation about the recognition of
Common Materials for Singing of the student —

Yoko YAMAMOTO

In 1958, the course of study was annunciated with legal binding for the first time. It might be possible to say the education of Japan was unified nationwide after the War.

Then, the course of study had been revised every approximately 10 years, and the 6th revised in 2017 will be implemented at 2020.

As for the music common educational tool, song teaching materials and appreciation teaching materials were illustrated as the national and common music from the course of study in 1958. An appreciation common educational tool wasn't illustrated since 1989, but the song common educational tool has been continued still. The song common educational tool called Common Materials for Singing increased one song but there is not a change of chosen songs since 1989.

This time, in course of study revision in 2017, the readjustment of content composition was done by every subject from the common viewpoint. It will be possible to say that it showed the conversion of the way of thinking according to the big

change of the society clearly.

In this paper, the background and the change of Common Materials for Singing reviewed. And the investigation about student recognition analyzed. This study shows the importance of Common Materials for Singing and in addition the directionality and the future.

1. はじめに

2017年（平成29年）告示された小学校学習指導要領は、2020年度より完全実施される。今回の改訂は第2次世界大戦後、新生日本の音楽教育を目指した1947年（昭和22年）「学習指導要領 音楽編（試案）」、「小学校学習指導要領 音楽科編（試案）」1951年（昭和26年）改訂版を経て、はじめて法的拘束力をもつようになった1958年（昭和33年）の学習指導要領から数えて6回目の改訂となる。ほぼ10年ごとに改訂されてきた学習指導要領であるが、折しも2017年は明治150年にあたる。それぞれの時代を反映して学習指導要領の内容は変化しているが、今回の学習指導要領の改訂は、従来それぞれの教科で作成してきた目標や指導内容の視点を共通に再整理したことが大きなポイントといえるだろう。

本論考では、小学校音楽科学習指導要領の中の歌唱共通教材に着目して、その意義を考察する。はじめに歌唱共通教材の歴史的な変遷に触れ、後半は初等音楽科指導法の授業で歌唱共通教材を取り上げた際に行った学生の楽曲に対する認知度調査から歌唱共通教材の実態をまとめ、その今後の在り方を探っていく。

2. 歌唱共通教材の変遷

歌唱共通教材は、1958年（昭和33年）の小学校学習指導要領の「愛好曲をもたせるように」という趣旨から、歌唱教材として各学年3曲ずつ提示されたことから始まった。

この1958年の学習指導要領は、教育課程審議会の基本方針「最近における文化・科学・産業などの急速な進展に即応して国民生活の向上を図り、かつ、独立国家として国際社会に新しい地歩を確保するためには、国民の教育水準を一段と高めなければならない」を受け、音楽科の改訂方針を6項目とした。

- (1) 音楽の学習は、鑑賞や表現の各領域にわたり、学年の児童発達に応じ、発展的・系統的に指導すること。
- (2) 低学年は、特に、音楽学習にとって重要な基礎的段階をなすものであるから、その指導の内容、方法の改善充実を図ること。
- (3) 各学年の目標をいっそう明らかにするとともに、内容の精選充実と、その標準化を図り、著しい地域差や学校差を取り除くようにすること。
- (4) 学校における音楽指導は、社会音楽との関連をもじゅうぶんに考慮し、児童の音楽的情操をつちかい、鑑賞力を高めるようにすること。
- (5) 教師は、すべて音楽指導の能力を備えていなければならないから、教員養成と現職教育の強化徹底を図ること。なお、この教科の性格上専科教員を置き得るように措置することが望ましいこと。
- (6) 施設・設備の充実と、その適切な運営を図ること。

この6項目の改訂方針に基づいて、小学校音楽科学習指導要領の改訂がなされた。その改訂の要点は、以下の5点である。

- (1) 領域を整理して、重複を避けたこと
現行は歌唱・器楽・鑑賞・創造的表現・リズム反応の5領域並列の形で示され、内容も重複している点が多いため、大きく「鑑賞」「表現」の2つに整理し、「表現」の中を歌唱・器楽・創作の3つの活動を含めて示した。
- (2) 系統的発展を考慮し、自主的・創造的学習ができるようにしたこと
低学年では特に感覚面に重点を置いて指導し、論理的思考力が発達するにつれて、学年が進むにつれて理解面や表現技術の面を増や

すようにした。読譜・記譜の系統的な指導とあいまって、特に旋律楽器の指導などを充実し、自主的・創造的な学習ができるようにした。

(3) 低学年の指導を強化したこと

低学年は、音楽学習にとって特に重要な時期であるから、現行よりもその指導を充実した。低学年の時期は、感覚的な洗練や表現技能の基礎を築くのに重要な時期であり、家庭や幼稚園との関連を図って、楽しく明るい学校生活を営ませるのに音楽は重要な役割を果たす。そこで、低学年では、まず、楽しい音楽指導をすること、美しい音楽を数多く聞かせてリズムや和声に対する感覚を洗練すること、リズム楽器のほかに簡単な旋律楽器にも親しませていくようにした。そこで、音楽指導の授業時数を平均2時間から最低3時間に増やした。

(4) 全国の標準化を図ったこと

他教科に比べて、地域差や学校差（学級差）が特にはなはだしい。この原因には、教師の指導力の不均衡、施設・設備の充実度、指導行政の不備などがある。そのため、各学年の目標をいっそう明らかにし、内容を質と量の両面から精選し、最低線をそろえたとともにそれを引き上げて、全国的な標準化を図った。

(5) 愛好曲をもたせるようにしたこと

生活の中へ音楽を浸透させ、うるおいをもたせるために、特に全国すべての学校で共通に学習する歌唱教材を各学年3曲、鑑賞教材を各学年3曲ずつ示した。

ここで注目されることは、従来、歌唱・器楽・鑑賞・創造的表現・リズム反応の5つの領域としていたものを「鑑賞」と「表現」の2つの領域に整理し、その「表現」の中を歌唱・器楽・創作の3分野に分けて示したこと、全国の標準化を図るために、内容を質・量の両面から精選し、系統的発展に配慮したことなどであるが、この学習指導要領の基本的な考え方はその後も踏襲され、現在の学習指導要領の根底となっていると

いえる。そして、このときはじめて、歌唱・鑑賞とも各学年3曲ずつが全国共通の楽曲として例示された。

改訂の要点5番目の「愛好曲をもたせる」に「特に全国すべての学校で共通に学習する」、4番目の「全国の標準化」には「内容を質と量の両面から精選し、最低線をそろえる」とあり、それまで認められていた地域差や独自性を全国標準化しようとするものであることが読み取れる。

ここではじめて登場した共通教材、これらの歌唱教材はすでに、戦前からの唱歌であり、道德教育の徹底などと考え合わせると戦後の民主主義が、独立国家建設の波に多少後退してきたような感じも受ける。当時の新聞や雑誌には、国家の教育に対する管理統制への反対や音楽科の授業時数が削減されるのではないかという危惧の意見が多数見られる。結果的には、第1学年で週2時間標準が最低3時間になり、他の学年も時間数を削減されることはなかった。

このとき例示された歌唱教材は以下のようなものである。継続して現在まで歌唱共通教材となっている曲、いったん外されて復帰した曲、そのまま消えた曲、学年が移動したものなどがある（表1）。

表1 1958年（昭和33年）

1年	2年	3年	4年	5年	6年
かたつむり	さくらさくら	春の小川	子守歌（陽旋法）	こいのぼり	おぼろ月夜
月	雪	もみじ	村のかじや	海	われは海の子
日の丸	春がきた	汽車	赤とんぼ	冬げしき	ふるさと

（注）太字は現在まで同学年で継続されている曲。

1968年（昭和43年）の学習指導要領にも、各学年3曲が例示されている。

3年の「汽車」が「村まつり」に、4年の「赤とんぼ」が「茶つみ」に差し替えられ、「日の丸」が「ひのまる」、「子守歌（陽旋法）」が「子もり歌」という表記に変わっている（表2）。

表 2 1968年(昭和43年)

1年	2年	3年	4年	5年	6年
かたつむり	さくらさくら	春の小川	子もり歌	こいのぼり	おぼろ月夜
月	雪	もみじ	村のかじや	海	われは海の子
ひのまる	春がきた	村まつり	茶つみ	冬げしき	ふるさと

(注) 太字は新たに入った曲、斜体は表記が変わった曲。

1978年(昭和53年)の学習指導要領でも、例示は各学年3曲であるが、選曲が大きく変更された(表3)。

表 3 1978年(昭和53年)

1年	2年	3年	4年	5年	6年
うみ	夕やけこやけ	春の小川	さくらさくら	子もり歌	おぼろ月夜
ひらいたひらいた	かくれんぼ	うさぎ	もみじ	スキーの歌	かりがわたる
ひのまる	春がきた	ふじ山	とんび	冬げしき	ふるさと

(注) 太字は新たに入った曲、斜体は学年が変更された曲。

2年「さくらさくら」は4年に移動、3年「もみじ」が4年に、4年「子もり歌」は5年に移動。「うみ」(1年)「夕やけこやけ」(2年)「ふじ山」(3年)「とんび」(4年)「スキーの歌」(5年)「かりがわたる」(6年)が新たに入った。

また、1年「ひらいたひらいた」2年「かくれんぼ」3年「うさぎ」4年「さくらさくら」5年「子もり歌」と1～5年まで1曲ずつ日本のふし(日本の旋法を用いたもの、わらべうた、日本古謡等)が入った。それに伴って「かたつむり」「月」「雪」「村まつり」「こいのぼり」「海」「われは海の子」が外れた。

この学習指導要領から、「表現」領域では目標・指導内容が2学年まとめて記載されるようになった。

1989年(平成元年)から歌唱共通教材の曲数の例示が各学年4曲に増えた。低・中・高学年すべて、その中から3曲を取り上げるようにと示された(表4)。

表 4 1989年(平成元年)

1年	2年	3年	4年	5年	6年
うみ	かくれんぼ	うさぎ	さくらさくら	こいのぼり	越天楽今様
かたつむり	春がきた	茶つみ	とんび	子もり歌	おぼろ月夜
日のまる	虫のこえ	春の小川	まきばの朝	スキーの歌	ふるさと
ひらいたひらいた	夕やけこやけ	ふじ山	もみじ	冬げしき	われは海の子

(注) 太字は新曲、斜体は返り咲いた曲。

1曲増えたことから、前回外れた「かたつむり」(1年)「こいのぼり」(5年)「われは海の子」(6年)が復活し、2年に「虫のこえ」4年に「まきばの朝」6年に「越天楽今様」が加わった。これで6年にも日本古謡が取り入れられ、全学年に日本のふしの楽曲が入った。

1998年(平成10年)の歌唱共通教材、各学年4曲の楽曲は全く同一で変化がない。低・中学年は引き続き4曲の中から3曲、高学年は4曲の中から2曲取り上げるよう変更になった。直接関係はないが、これまで鑑賞にも共通教材として3曲の例示があったが、この学習指導要領から鑑賞共通教材の例示はなくなった。高学年が2曲になったことと考えると地域や学校の実態に合わせた活動の充実を想定したものと考えられる。

2008年(平成20年)の改訂でも、歌唱共通教材の各学年4曲の楽曲の変更はなかった。ただ低・中学年でこれまで4曲の中から3曲としていたものを「各学年とも共通教材を含めて」と4曲全部を教材にすること、高学年では前回いったん4曲の中から2曲に減ったものが、また3曲となった。

2017年(平成29年)、今回の改訂では、「育成を目指す資質・能力」「主体的・対話的で深い学び」などのキーワードとともに「生きる力」をさらに具体化し、「何のために学ぶのか」という各教科等を学ぶ意義の共有が図られた。各教科で「生きて働く知識・技能の習得」「思考力・判断力・表現力等の育成」「学びに向かう力・人間性等の涵養」の3本柱に基づく再整理がされた。

学習指導要領解説の歌唱共通教材に関する記述は、

「第4章 指導計画の作成と内容の取扱い」「2 内容の取扱いと指導上の配慮事項」(4) アに「歌唱教材については、我が国や郷土の音楽に愛着がもてるよう、共通教材のほか、長い間親しまれてきた唱歌、それぞれの地方に伝承されているわらべうたや民謡など日本のうたを含めて取り上げるようにすること。」

とあり、その説明として、

「多くの人々に長い間親しまれてきた日本のうたには、唱歌や童謡など、児童が豊かな表現を楽しむことのできるものが数多くある。それらのうたは、人々の生活や心情と深い関わりをもちながら、世代を超えて受け継がれてきた我が国の音楽文化といえるものであり、また、季節や自然などの風情や美しさを感じ取り、いとおしんできた日本人の感性が息づいている音楽とも言える。

また、わらべうたや民謡、日本古謡は、我が国の伝統的な音感覚に根ざした音楽であり、共通教材として取り上げたものも、古くから親しまれ、比較的広域で歌われてきたものである。しかし、こうした日本のうたのもつよさや楽しさは、むしろそれぞれの土地に伝承され親しまれてきたものにこそ味わいあるものが多く見られる。

なお、我が国や郷土の音楽に愛着がもてるように示したのは、このような特徴のある日本のうたを扱うねらいを明確にしたものであり、こうした観点も含めて日本のうたを取り上げるようにすることが大切である。」

と書かれている。

こうした内容の記述は現行の学習指導要領にもあるが、項目の順位が前回は「相対的な音程感覚を育てるために、適宜、移動ド唱法を用いること」をアとしているのに対し、今回はこちらをアと一番にしていること、説明の最後に「我が国や郷土の音楽に愛着がもてるよう」日本のうたを取り上げるようにすることが大切としている。ここでいう日本のうたは広くは唱歌も童謡も含まれると思われるが、わらべうたや民謡など

の独特の音感覚に根ざした音楽をこれからも大事にしていくことの必要性を説いている。

1989年（平成元年）の歌唱共通教材から各学年1曲ずつ、日本のうたが配置されているので、これらの楽曲から発展させた活動などが現在の時期に活発に行われないと、このまま日本独自の音感覚が失われてしまうのではないかという危機感を強く感じる。

今回の改訂で、歌唱共通教材についてはその存在そのものも含めて、変更があるのではないかと予想していたが、学習指導要領の再整理の作業の中でも変化がなかった。整理の視点を変えても、音楽科が目指す内容には変更はないということであると理解するが、歌唱共通教材については再考するチャンスであったのではないかと思う。

結果、歌唱共通教材は、1989年（平成元年）から全く変わらず、今回の改訂では低・中学年では4曲全部、高学年は4曲中3曲と示され、歌唱共通教材に対するウエイトは増え、これにより40年間にわたって同一の歌唱共通教材が実施されることとなる。「世代を超えて愛唱できる歌」という観点からの継続と思われるが、この24曲すべてが後世まで伝えたいものをもつ楽曲であるかについては多少疑問も残る。学生の認知度調査の結果と合わせて、後半で考察していく。

3. 歌唱共通教材の出自

歌唱共通教材に取り上げられている曲は、わらべうた、日本古謡などの日本のふし以外、すべて明治以降の日本人による作詞・作曲で、純正日本で制作したものである。

1872年（明治5年）学制公布の際に、すでに小学校は「唱歌」、中学校は「奏楽」という科目が設定され、「当分之ヲ欠ク」とされた。当時の音楽教育の中心となった伊澤修二は1875年（明治8年）自らアメリカに音楽教育を学びに出かけ、帰国して1879年（明治12年）文部省に音楽取調掛を創設。翌年には音楽教師養成のための音楽伝習生を派遣し、内外の音

楽の調査、外国人教師メースンの招聘などを実施した。唱歌授業も1880年（明治13年）から徳性の涵養（道徳心の育成）を図る目的で始められた。

1881年（明治14年）には、文部省『小学唱歌集』初版（第二編は明治16年、第三編は明治17年）が出版された。「蛍の光」「かすみか雲か」「仰げば尊し」など今でも歌われている曲が掲載されている。和洋折衷の新曲を目指したが、大部分が西洋の曲に日本の古語や雅語を羅列した歌詞をつ

表5 歌唱共通教材

	曲名	原曲名	作成年月	初出掲載
1年	うみ	ウミ	昭和16年3月	ウタノホン上
	かたつむり		明治44年5月	尋常小学唱歌 一
	日のまる	日の丸の旗	明治44年5月	尋常小学唱歌 一
	ひらいたひらいた			わらべうた
2年	かくれんぼ	カクレンボ	昭和16年3月	ウタノホン 上
	春がきた	春が来た	明治43年7月	尋常小学読本唱歌
	虫のこえ	蟲のこゑ	明治43年7月	尋常小学読本唱歌
	夕やけこやけ	夕焼け小焼け	1919年作詞 1923年作曲	あたらしい童謡・その一
3年	うさぎ		明治25年6月	小学唱歌 二
	茶つみ	茶摘	明治45年3月	尋常小学唱歌 三
	春の小川		大正元年12月	尋常小学唱歌 四
	ふじ山	ふじの山	明治43年7月	尋常小学読本唱歌
4年	さくらさくら			日本古謡
	とんび		大正8年1月	大正少年唱歌 一
	まきばの朝	牧場の朝	昭和7年12月	新訂尋常小学唱歌 四
	もみじ	紅葉	明治44年6月	尋常小学唱歌 二
5年	こいのぼり	鯉のぼり	大正2年5月	尋常小学唱歌 五
	子もり歌			日本古謡
	スキーの歌		昭和7年12月	新訂尋常小学唱歌 六
	冬げしき	冬景色	大正2年5月	尋常小学唱歌 五
6年	越天楽今様			日本古謡
	おぼろ月夜	朧月夜	大正3年6月	尋常小学唱歌 六
	ふるさと	故郷	大正3年6月	尋常小学唱歌 六
	われは海の子		明治43年7月	尋常小学読本唱歌

（参考）『日本唱歌集』堀内敬三・井上武士編 岩波文庫（1958年）、他。

けたものであった。その後、1887年（明治20年）音楽取調掛が東京音楽学校になり、1893年（明治26年）には伊澤修二編纂『小学唱歌（全6巻）』、1900年（明治33年）には納所弁次郎・田村虎蔵共編『教科適用幼年唱歌』（「花咲爺」「兎と亀」など）が発刊された。1907年（明治40年）には、小学校令改正で6年間義務教育となり、「唱歌」は必修科目となったが「欠クコトヲ得」という状況で、都市部では実施されても全国に「唱歌」が完

全必修になるのは1926年（大正15年）のことで学制の公布から実に54年後のことであった。

その間、1910年（明治43年）には、文部省が直接編集した27曲からなる最初の「唱歌集」となる『尋常小学読本唱歌』が、翌1911年（明治44年）5月から1914年（大正3年）6月までに『尋常小学唱歌』全6巻が順次刊行され、日本人の新作による教材20曲から22曲が系統的に配当された。そこには現在歌唱共通教材になっている「われは海の子」「冬景色」など多数の曲が掲載されている。

3つの戦争に連続して戦勝国となった日本は、明治維新以来の殖産興業、富国強兵からすっかり自信をつけて、豊かな大正期を迎えた。童謡・童話運動、新教育・芸術教育の機運が高まり、1918年（大正7年）鈴木三重吉が雑誌『赤い鳥』を創刊。「かなりや」や「七つの子」「青い目の人形」などの童謡が民間から生まれた。

文部省唱歌	作詞	作曲
○	林 柳波	井上武士
○		
○	高野辰之	岡野貞一
○	林 柳波	下総統一
○	高野辰之	岡野貞一
○		
	中村雨紅	草川 信
○		
○	高野辰之	岡野貞一
○	巖谷小波	
	葛原しげる	梁田 貞
○		船橋栄吉
○	高野辰之	岡野貞一
○		
○	林 柳波	橋本國彦
○		
	慈鎮和尚	
○	高野辰之	岡野貞一
○	高野辰之	岡野貞一
○		

前述のように、現在の24曲の歌唱共通教材には、外国の曲はない。低学年で昔から親しまれている「こぎつね」や「ぶんぶんぶん」「かっこう」などは外国のメロディーに日本語の歌詞をつけたもので、共通教材にはなっていない。

表5は、歌唱共通教材24曲の一覧である。学年、曲名、原曲名、作成年月、初出掲載、文部省唱歌かどうか、作詞者、作曲者の順にまとめた。これを見るとわかるように、各学年1曲の日本のふし以外は、1910年（明治43年）の『尋常小学読本唱歌』から4曲「春がきた」「虫のこえ」「ふじ山」「われは海の子」、1911年（明治44年）から1914年（大正3年）の『尋常小学唱歌』から9曲「かたつむり」「日のまる」「茶つみ」「春の小川」「もみじ」「こいのぼり」「冬げしき」「おぼろ月夜」「ふるさと」がある。実に24曲中（日本のふしを除けば18曲中）13曲が1910年（明治43年）から1914年（大正3年）の短期間につくられた「文部省唱歌」である。

「夕やけこやけ」は「童謡」で、1923年（大正12年）に作曲されている。「とんび」も『大正少年唱歌』という民間の出版物の第一集に掲載されたもので、文部省唱歌ではない。「スキーの歌」「まきばの朝」の2曲は、1932年（昭和7年）の『新訂尋常小学唱歌』、「うみ」が最も新しく、1941年（昭和16年）の『ウタノホン 上』に掲載された。

つまり現在の歌唱共通教材は、100年以上前につくられたものが70%以上で、一番新しいものでも、80年近く経ったものである。

4. 学生の認知度調査

小学校で音楽専科教諭として、長い間歌唱共通教材を指導してきた。新任のころ6年生の教科書の一番初めは「おぼろ月夜」であった。都会で生まれ育った者にとって「おぼろ月夜」の歌詞の意味や情景を想像することは難しく、その曲のよさもあまり感じないまま授業で子どもたちと歌った。その後経験を積んで、歌詞の表す情景やおぼろ月の意味や弱起の3拍子、メロディーの美しさなどを自分自身で感じてからは、その

授業内容も子どもの反応も大きく変わったことを実感している。

歌唱共通教材は、低学年の曲は簡易な親しみやすい曲が多いので、制作された年代は古くとも比較的教材として使いやすく、反復することで器楽や身体表現などにも発展させることができる教材といえる。それに対して高学年の曲は、大学生であっても、歌詞が古語で書かれているため数回歌っただけでは意味がよくわからず、その情景を想像することが難しいものが多い。それでも歌詞のリズムのよさ、メロディーの美しさは内容や情景が完全にわからなくても感じることはできる。しかし、最初から取り組まずに敬遠してしまう傾向があるのではないと思われる。

初等音楽科指導法の授業では、意図的に歌唱共通教材を取り上げているが、その理由はいくつかある。一つは学習指導要領にあるように「世代を超えて歌える歌」について興味をもって取り組んでほしいから、もう一つは学生があまり小学校で歌ってきていないということを実感しているからである。

特に高学年の曲は難しく、数回聴いたり歌ったりする程度では、なかなか身に入らない。高学年の音楽授業時間数は、低学年より年間20時間少なく、その上合奏や合唱などに取り組むと多くの時間がそれに費やされることになる。実際現場にいたときも特に音楽会など外部の行事に参加する5年生では、秋から歌いたい「冬景色」や「スキーの歌」に十分な時間が割けなかった経験がある。

初等音楽科指導法の授業では、少しずつ何度か繰り返し歌う活動と高学年の曲については歌詞の内容を自分で調べほかの人に伝える活動をここ数年している。教員になりたいと思っている学生の多くはこの歌唱共通教材を知らないことに危機感をもつ。自分の小学校時代に本当に歌わなかったのか、また忘れてしまったのかはわからないが、授業で一緒に歌うときに「知らない」という学生がいる。

特に驚いたのは、1年の「日のまる」と3年の「ふじ山」である。その実態を知るために、昨年度（2017年度）と今年度（2018年度）の2回の初等音楽科指導法の授業で、学生にそれぞれの曲の認知度をたずねた。

2017年度は、歌唱共通教材の一覧をつくって、その曲を知っているかどうかを問うた。今年度は、曲の一覧をつくるところから課題として、学生自身が作成年、作詞・作曲者を調べ、その曲を知っているかどうかを「歌える」「聞いたことがある」「知らない」の3段階で問うた。その結果が表6である。認知度であるので、「知らない」の集計はない。

現行の学習指導要領では、低・中学年は4曲全部、高学年は4曲中3曲を学ぶことになっているが、その前は低・中学年は3曲、高学年は2曲であったので、学生が各学年1～2曲知らないということはあると思うが、低学年では1年の「日のまる」の認知度が格段に低い。階名唱やドレミの高さ、鍵盤ハーモニカなどの教材として、4分音符と4分休符のみでつくられている楽曲で、教材性は高いといえる。国旗にかかわる歌詞であるので敬遠されているのかもしれない。2年の「かくれんぼ」も半分ほどの認知度だが、声の強弱に気づくことのできる格好の教材といえる。3年の「ふじ山」の認知度が2017年度は3分の1だったことには特に驚いた。日本一の山で千葉県内各地からも天気の良い日は望むこともできるのにと意外に思った。全国の小学校で共通して歌える歌をということで始まった歌唱共通教材であるが、実際はその地域の環境や立地によってその歌が盛んに歌われるかどうかが大きく左右されることは容易に考えられる。山の中で生活している子どもたちが「われは海の子」を朗々と歌うとは考えにくい、海の近くで育った学生はこの歌は「校歌」だと思っていたというくらい歌ったという話も聞いたことがある。

4年では「まきばの朝」の認知度が低い、この曲は通常の16小節の楽曲ではなく20小節あり、同じメロディーの繰り返しが出てこないなど、1989年（平成元年）に歌唱共通教材になったときから実際に指導していても難しいと感じていた。「さくらさくら」「もみじ」の2曲は非常に認知度が高いのに比べると大きな差がある。指導しやすさも大きくかわっていると思われるが、指導者が思いをもって指導した場合、子どもの記憶に残る曲でもあるようである。

5年の「こいのぼり」は2017年度の調査では認知度が非常に高くなっ

表 6 歌唱共通教材認知度調査

	曲名	2018年度				2017年度	
		歌った ことがある	聞いた ことがある	認知数	認知度	知って いる	認知度
		62名中	62名中	合計	計(%)	42名中	計(%)
1年	うみ	51	7	58	93.5	37	88.1
	かたつむり	52	7	59	95.2	31	73.8
	日のまる	6	9	15	24.2	6	14.3
	ひらいたひらいた	39	17	56	90.3	28	66.7
2年	かくれんぼ	17	19	36	58.1	17	40.5
	春がきた	52	7	59	95.2	39	92.9
	虫のこえ	37	16	53	85.5	38	90.5
	夕やけこやけ	50	11	61	98.4	41	97.6
3年	うさぎ	26	14	40	64.5	18	42.9
	茶つみ	36	14	50	80.6	28	66.7
	春の小川	36	11	47	75.8	39	92.9
	ふじ山	23	9	32	51.6	14	33.3
4年	さくらさくら	48	9	57	91.9	38	90.5
	とんび	16	18	34	54.8	19	45.2
	まきばの朝	5	10	15	24.2	21	50
	もみじ	58	2	60	96.8	40	95.2
5年	こいのぼり	18	8	26	41.9	37	88.1
	子もり歌	30	17	47	75.8	27	64.3
	スキーの歌	2	8	10	16.1	4	9.5
	冬げしき	3	4	7	11.3	6	14.3
6年	越天楽今様	1	3	4	6.5	6	14.3
	おぼろ月夜	14	14	28	45.2	25	59.5
	ふるさと	56	4	60	96.8	41	97.6
	われは海の子	17	12	29	46.8	27	64.3
	平均認知度				62.4		62.2
	平均認知曲数	11.2	4.03	15.2		14.9	

ているが、これは学生がよく調べずに、「屋根より高いこいのぼり～」の「こいのぼり」を思っただけで答えた回答数が多いためである（本来は「いらかの

波と雲の波〜」)。全体に5年の歌唱共通教材の認知度が低く、「冬げしき」「スキーの歌」と季節の近いものが2つあることも影響しているのではないと思われる。6年の「越天楽今様」の認知度は極めて低いが、反対にこの曲を雅楽とともに学んだ学生はいまでも強い印象を持ち続けている。

5. おわりに

2011年（平成23年）の東日本大震災の後、音楽の力をみんなが感じ、文部省唱歌「ふるさと」や新たにつくられた「ふるさと」「花は咲く」などの歌をみんなで声を合わせて歌った。繰り返し歌ううちにその歌に思いが入り、より深く互いを感じながら歌い続けることができた。

教員を目指す学生は、実際にそれを指導するかどうかは別にして、歌唱共通教材のいくつかは自信をもって歌えるようになってほしいと願う。意味を知り、情景を想像しながら歌うことで長年大事にされてきた歌のよさを実感することができるであろう。

「ふるさと」は「夕やけこやけ」「もみじ」と並び、認知度ベスト3の曲といえる。これらの曲に共通することは、メロディーが親しみやすく、歌詞の情景がそれぞれの状況に応じて想像できるということかもしれない。狭い国土ではあるが、日本は南北にとっても長く、海に囲まれているものの、海のない地域などさまざまである。これからは日本で生まれ育った人ばかりでなく、さまざまな地域や文化の出身の多様な人たちが日本に暮らすようになるであろう。

みんなで心を合わせて歌える歌をこれからも考え続けていきたい。またそれと同時に現在の歌唱共通教材がもつ個々の曲のよさや教材性を追究し、実際の授業でどのような取り組みが考えられるかの提案もしたい。音楽そのもののもつ力をこれからの社会生活の中で十二分に生かすことができるよう考え、これからも発信し続けていきたい。

（参考・引用文献）

真篠 将『これからの音楽教育』（1958）全音楽譜出版社

堀内敬三・井上武士編『日本唱歌集』（1958）岩波文庫
園部三郎・山住正己著『日本の子どもの歌—歴史と展望—』（1962）岩波新書
金田一春彦・安西愛子編『日本の唱歌〔上〕明治篇』（1977）講談社文庫
同『日本の唱歌〔中〕大正・昭和篇』（1979）講談社文庫
岩井正浩『資料日本音楽教育小史』（1978）青葉図書
竹内貴久雄著『唱歌・童謡 120 の真実』（2017）ヤマハミュージックメディア
文部省 小学校学習指導要領 昭和 33 年
文部科学省 小学校学習指導要領解説 音楽編 平成 20 年 平成 29 年
山本陽子『学校教育における音楽科教育の果たす役割—生涯学習の視点から見た
小学校音楽科教育—』（2001）東京学芸大学修士論文